

2009 年度  
卒 業 論 文  
要 約

**氏名****卒業論文タイトル**

---

香川 雅子	現代社会における「服育」の役割—心の豊かさを求めて—
北山 靖子	「ものづくり」における子どもの成長—環境教育の実践を通して—
後藤 りさ	アニマル・セラピーのリラクゼーション効果—障害者補助犬を通して—
松浦 勇	「亀」から地球温暖化を見直す—希少種をめぐって—
三谷 由里子	幼少期の環境における親と子との関わり方 —子どもの健全な発達を促すために—
山下 尚子	いのちの「ケア」—健全な生命の循環—
山本 諒	人と森林との共存 —自然の保全 preservation と保存 conservation —

〈目次〉

はじめに

第一章 衣服と環境

第一節 江戸のリサイクルシステム

第二節 現代の取り組み

第三節 子供の教育環境を考える

第二章 衣服の文化と歴史

第一節 多民族国家インドネシアの民族衣装

第二節 インドネシアの布文化と歴史

第三節 都市化における民族意識の変化—両国の比較を通じて—

第三章 衣服と現代社会

第一節 衣服と心身の健康

第二節 衣服の自己表現—多様性とTPO—

第三節 衣服がはぐくむ豊かな社会

おわりに

〈要約〉

電車内で化粧をする女性や、寝巻同然の恰好で講義を受ける学生など、現代社会において、周囲の人々の存在を無視した行為が多く見受けられる。私たちは物質的に豊かで快適な暮らしを送っている。しかし、快適な暮らしになると同時に私たち人間の心は貧しくなっていないだろうか。今や多くのものが機械化され、そのことによって生身の人間同士の触れ合いの場が少なくなっていると感じられる。自動ドアがあれば、次の人のためにそっと手でドアを支えておく思いやりも生まれない。ゲーム機で遊ぶことは、1人でも楽しめるし、けがをしても痛みを感じなくて済むが、それは私たちの心と体の感覚を鈍らせる。様々な価値観をもった人々と触れ合い、それを受け入れ、尊重するという経験が私たちの心を豊かにしていくのではないだろうか。

私たちが生活のほとんどの時間身につけている衣服について、「環境」「歴史・文化」「社会」の3つの角度から考えることで、その役割や人間同士のつながりや人間と自然のつながりの大切さが見えてくる。衣服を手入れをしながら大切にすることは衣服と地球環境への思いやりとつながるし、自分の心と体の健康を守ることにもなる。日本や他国の衣服文化を知ることが、伝統文化を守り伝えていくことの豊かさや誇りを改めて感じたり、異なる価値観を尊重することへつながっていく。TPOを考えた着こなしをすることは、社会に生きる多くの人々への優しさとなる。このように、普段何気なく身につけている衣服だが、私たちが衣服の持つ意味を考え、大切に、そして上手に着こなすことで、思いやりの心が生まれ、その広がりが本当の意味での豊かな社会につながっていく。

「服育」は危機的状況にある地球環境とともに、私たち人間の心の環境に対しても大きな役割を持っているといえる。

# 「ものづくり」における子どもの成長—環境教育の実践を通して—

北山 靖子

## <目次>

### はじめに

#### 第一章 「ものづくり」における日本人の自然の捉え方

##### 第一節 日本人の「もの」の捉え方

##### 第二節 「ものづくり」の心と技の継承—宮大工・西岡常一の知恵—

##### 第三節 生活の中の自然美—民芸における「用の美」—

#### 第二章 子どもと「ものづくり」

##### 第一節 子どもが「手」を使うことの意味

##### 第二節 子どもの遊びと生活の変遷

##### 第三節 家庭における手仕事

#### 第三章 環境教育における「ものづくり」の役割

##### 第一節 学校におけるものづくり

##### 第二節 地域に根差したものづくり

##### 第三節 生涯学習としてのものづくり

### おわりに

## <要約>

私達は日常生活において多くの「もの」と関わっている。しかし昔と現在では「もの」と人との関わり方は大きく変化している。「もの」が豊かでなかった時代は、自ら生活のための道具を作ったり、使えなくなっても工夫することで最後まで「もの」を大切に使ってきた。現在はお店に行けば好きなものが好きな時に買え、いらなくなったら捨ててしまう。また子ども達においても「もの」が豊かな生活になったことで、自分の手を使って思いっきり遊んだり、遊びや生活の世界を創造することが少なくなっている。それだけでなく、情報化にともなって、「もの」に対する愛着が失われ、また「もの」と人との関係が希薄化しているのではないだろうか。このような現在だからこそ「もの」と人、人と人との関係が親しみに溢れる世界をつくる必要があるのではないだろうか。それは環境破壊が深刻化している現代において、問題を解決し、豊かな未来を創造するために重要な意味を持つだろう。

それが実現されるためには、「ものづくり」が重要になってくると考える。単なる消費のための「もの」ではなく、生活や身体の一部となり得る親しみのある「もの」をつくることに意味がある。そのため、「手」による「ものづくり」に焦点をあててこの論文を書いている。

第一章では、ものづくりにおいて日本で活躍した人物の思想を基に、「ものづくり」における日本人と自然との関わり方を論じている。次に第二章では、子どもの「ものづくり」の変遷をたどり、子どもと「ものづくり」の関係性を探る中で、子どもにとっての「ものづくり」の意義や可能性を論じている。そして第三章では、環境教育によって物質的な「もの」の創造が「物事」の創造へとつながることを論じている。

「ものづくり」を行っている時間は誰もが生き生きと輝いている瞬間である。「ものづくり」には新たな未来を生み出す力がある。そのため、周りにいる人や、その人たちが住む地域、地球に対しても目を向け、それらが直面する問題に積極的に関わっていくことのできる子どもを育むために重要であると考えられる。

# アニマル・セラピーのリラクゼーション効果

## —障害者補助犬を通して—

後藤 りさ

### 《目次》

#### 第一章 動物の持つ不思議な力、アニマル・セラピー

##### 第一節 動物と人の歴史

##### 第二節 乗馬のリズム

##### 第三節 イルカとスキンシップ

#### —ドルフィン体験を通して—

#### 第二章 犬と人との信頼性

##### 第一節 身体障害者補助犬とは何か

##### 第二節 介助犬の活躍

##### 第三節 盲導犬訓練センターを訪ねて

#### 第三章 アニマル・セラピーの現状

##### 第一節 アニマル・セラピーの有効性と限界

##### 第二節 身体障害者補助犬の問題点

##### 第三節 これからのアニマル・セラピー

### 《要約》

私は家で犬を飼っている。犬とは言葉が通じなくても触れているだけで、自然と穏やかな気持ちになり、怒っているときでも気持ちを落ち着かせてくれる。犬に話しかけることによって、気持ちがスッキリすることもある。触れ合うだけで、気持ちを落ち着かせてくれる動物の癒しの効果に、私は以前から興味を持っていた。犬と生活しているだけで、自然と気持ちが安らぐことに気付いた。犬の世話をすることは簡単なことではない。面倒くさいと思ったこともある。しかしそんなことは関係ないと思えるぐらい、犬は私の家族にとって欠かせない存在になっている。

アニマル・セラピーとして用いられる動物は犬だけではなく馬やイルカなど、さまざまな動物がいる。動物によってそれぞれ違った目的により用いられ、効果をもたらしている。犬はドッグセラピーとして、老人ホームを訪問したり、病院で患者にリラックスできる瞬間を与えている。また、ドッグセラピーとして活躍しているのではないが、生活を共にする人に癒しや安らぎを与えている犬として、盲導犬や聴導犬、介助犬のような障害者補助犬がいる。このような犬は、障害者の役に立つだけでなくリラックス効果をもたらしている。障害者の補助をするという身体面だけでなく、安らぎを与えるという精神面でも人を支えている点に感心し、驚いた。アニマル・セラピーについて考えると、自分が家で飼っている犬に対する考え方も変わってきた。何も考えずにただ犬と触れ合っているだけで、気づかない間に気持ちが安らぐことは、犬の力であり、動物の持つ癒しの力である。もし私の家に犬がいなかったら、家の中がとても暗く感じるかもしれないと思う。そう考えると、動物は、人を癒すだけでなく、家族や友人などの人間関係も良いものにする力があるのであろうと私は思う。

また、アニマル・セラピーを調べていくうちに、身体障害者補助犬にたどり着いた。私も最初は、犬に厳しい訓練をさせて、少しかわいそうだなと思っていた一人だった。しかし犬は働くことを楽しいと感じ、そう感じさせるために、訓練士が多くの工夫をしていることを知った。

現在補助犬は、人々からの寄付金や募金、そしてボランティアで成り立っている。補助犬訓練士が少なく、また訓練する環境が整っていない所も多いのが現状である。補助犬を必要とする人が補助犬を大きく上回っている。一人でも多くの方が、障害者補助犬についての理解を深め、社会に定着することを願いたい。

# 「亀」から地球温暖化を見直す―希少種をめぐって―

松浦 勇

## <目次>

はじめに

第一章 「亀」の象徴とその意味

第一節 「亀」と日本人の歴史

第二節 宇宙世界における「亀」の象徴と意味合い

第三節 現代もなお身近な「亀」の存在

第二章 環境問題と「亀」との関係

第一節 海面上昇による産卵地の減少―その保護と未来―

第二節 メス化する「亀」

第三節 絶滅に瀕する希少種ガラパゴスゾウガメ

第三章 「亀」から学ぶ持続可能な地球環境―ライフスタイルの見直し―

第一節 生物多様性の価値と共生

第二節 生命中心主義の環境倫理学へ

第三節 持続可能な地球環境へ

おわりに



湊川神社の楠正成の墓



料理する前のスッポンを見せて頂いた



スッポンと野菜からうまみが出た鍋

## <要約>

近年、人間によって行われている森林破壊、開発による二酸化炭素の排出により地球温暖化のスピードは急速に進んでいる。また、世界各地でみられる動物の乱獲、ペットとして輸出入される動物によって生じる生態系の破壊が問題となっている。多くの生命は急激な地球の変化に順応できずに世界から姿を消している。それにもかかわらず、いまだなお人間は開発の手を止めようとはせず、さらに自分たちのより便利な生活のために、先進国を中心に地球に負荷を与え続けているのである。

そこで古来より日本人に親しみがあり、外来種、絶滅危惧種、ペットなどとして多くの顔を持つ亀からも

う一度地球環境を見直すことにしたい。また、筆者自身も15歳にもなる亀を飼っており、他の動物よりも特別な感情があることも、この論文を作成するにあたった一つの要因である。

第一章では、亀と人間が古来どのような関係を築いてきたかを述べる。第二章では、人間の手によって多種の亀が、多様な形で絶滅に追い込まれている現状を述べていく。そして、第三章においては、亀の例をあげながら、持続可能な地球環境をどのように目指していくかを述べる。多くの生物の棲みかを奪い、命を奪っている今の人間中心的な考えから脱し、多くの生物種と共生する道を考え直す。

亀という種は、文化的な面からみても興味深い生き物であり、古くから人間と関係が深いことが分かった。だが、亀に限らずこういった人間と共に生きてきた生物が姿を消しつつある。つまり、生物の多様性は急速に失われ、地球環境は過去にないスピードで悪化しているのが現状である。深刻な問題であるにもかかわらず、ほとんどの人々が見て見ぬふりをしていると言ってよいだろう。私たちは今すぐにでも持続可能な社会に向けて、現在の生活や、人生観を変革しなければならないのだ。

元の美しい地球に戻すことができるのは人間だけである。そして、動物や植物、昆虫などと、生き活きと暮らしたいという気持ちが心の根っこにはあるはずだ。これからの人間の課題として、亀や他のすべての生物が生息しやすい環境を保つことで、人類にとっても生存しやすい環境を将来に向けて築いていくことと言えよう。

# 幼少期の環境における親と子の関わり方

## —子どもの健全な発達を促すために—

三谷由里子

〈目次〉

はじめに

### 第一章 親と子の関わり

第一節 家庭環境と人格形成の要因

第二節 幼少期の成長

第三節 情緒豊かな生活

### 第二章 親が子どもに与える影響

第一節 肌と肌の触れ合いの大切さ

第二節 言葉の持つ力

第三節 自己の確信を育てるために

### 第三章 豊かな心を持った子どもに育てるために

第一節 五感を通した情操教育

第二節 体験学習による環境と生命の学び

第三節 健全な心の発達を促すには

おわりに

〈要約〉

赤ちゃんは生まれた時は、皆、まっさらな状態だ。その子ども達がどのように育つかは、その育った環境がものを言うと考えられる。どのように親が子に接すれば、その子の中にある無限の可能性を引き出し、なおかつ本来のその子自身でいられるかを考えてみた。

まず、幼少期に親子間での肌と肌の触れ合いは非常に大切で、それによってアタッチメントが形勢され、より深い愛情や結びつきが得られるようになるのである。それから、言葉の持つ力は偉大で、親が普段どのように子どもに言葉をかけているかが、子どもの人格を形成する上で重要になってくると考えられる。そして、豊かな心を育てるために、五感を通して、自然の中で遊び、活動してもらいたいと思う。大いなる自然から感動を味わい、そこから「生きる力」を育て、感性を豊かにすることだろう。

最後に、親の愛を子どもに伝え、なおかつ子どもの気持ちに共感することで、子どもはすくすくと育っていくと思う。また、一番身近にいる親が、子どもの無限の可能性を信じることで、子どもは自分に自信を持ち、伸びやかに明るくポジティブに人生を生きていくだろう。



# いのちの「ケア」—健全な生命の循環—

山下 尚子

## <目次>

はじめに

第一章 健全な食べ物によるいのちのケア

第一節 汚染された食品

第二節 健全な食べ物

第三節 健全な食べ物による生命力の回復

第二章 化学物質の恐怖

第一節 日本における農薬の歴史

第二節 農薬の効果と安全性

第三節 有機水銀—母から子へ—

第三章 今後の「いのち」のケア

第一節 五感を通して感じる「いのちの尊さ」の記録

—フィールドワークにおける夏野菜・米作り—

第二節 「いのち」のケアと自然治癒力

第三節 今後の「いのち」のケア—健全な生命の循環—

おわりに

## <要約>

現代では、農薬や食品添加物が使用され、旬の味や食べ物そのものの甘味や香りなどが損なわれた食べ物が、当たり前のように我々の食卓に並んでいる。研究や改良が行われ、安全である事が証明されて使用されている農薬や食品添加物であるが、それはあくまで現時点においてであって、今後、危険性が見つかるかもしれない。やはり、無農薬有機農法で栽培された、旬の食べ物を食べることが、我々の生命力を強化することに繋がる。旬の食べ物を食べることで、季節を味覚で感じるとともに、栄養を豊富に摂取することができる。また、無農薬有機農法であれば、自然環境にもまれ、堆肥の栄養をふんだんに吸収し、自然の恵みで育った食べ物であるため、その食べ物自体の旨味や甘味がぎゅぎゅ詰まっており、我々の生命力の働きを旺盛にしてくれる。我々に元々備わっている生命力の働きを活発にすることが、病気にかかりにくくし、また、病気を体の内部から治すことに繋がっている。

しかし、農薬や食品添加物のような化学物質が、我々の生活の中で、大きくよい効果をもたらしたことも事実である。農薬を使用したことにより、所要労力も時間も短縮された上に、収穫量は増え、見た目の良い物が簡単に作れるようになった。また、食品添加物によって、食欲をそそるような色や香りをつけたり、防腐剤などによって、食品を腐りにくくしたりすることもできるようになった。けれども、これは自然界にないものを人間が作り出し、環境の循環を狂わせることに繋がる。

水俣病は、人間が作り出した化学物質を自然界に放出し、環境を破壊したために起こった。当時、奇病や伝染病とも言われ、何の罪もない人々が、人間として接してもらえず、苦しみもがいて亡くなっていった。原因は、有機水銀を含んだ魚を食べたことが主であったが、汚染された魚を直接食べていない胎児にまで、化学物質の恐怖は及んだ。化学物質のような自然界にない汚染物質は、母体から胎盤を通過して胎児にまで行き渡ったのである。環境を破壊したことが循環し、ついには人間の体や心にまで破壊は巡ってきたのである。

最後に、私は2年間、フィールドワークで夏野菜作りともち米作りを行ってきた。その経験が、この論文を書くきっかけにもなったのであるが、無農薬有機農法で野菜を育て、まさに旬という時期に、とれたての新鮮な野菜を味わった。また、もち米に関しては、稲にかぶれながら無心になって雑草を抜き続け、無事に収穫祭を迎えることができた。試行錯誤してケアし、雑草の勢いに何度も心が折れそうになりながらも、自然や様々な方々の協力に支えられ、豊作となり、最後までやりきることができた。一生懸命苦勞して育てた作物は、とても愛情や感謝の気持ちがわき、食べた時は、普段食べているものとは比べ物にならないほど美味しかった。これらの作物もまた、生命力が旺盛であるため、我々の自然治癒力の働きを増進させてくれた。

環境の中で、すべての生命は循環している。フィールドワークで経験した「いのち」のケアから、すべての「いのち」は循環し、1つに繋がっているのだと実感した。今後、直接「いのち」に触れ、尊さや連続性を実感し、他の「いのち」も自分の「いのち」も互いにケアし、ケアされていくことが大切なのではないだろうか。



2009.7.24

収穫したピーマン、ミニトマト、なす



2009.8.7 収穫したスイカ



2009.9.11 成長した稲

《目次》

はじめに

第1章 環境破壊と森林の現状

第1節 世界の森林環境

第2節 日本の森林環境

第3節 森林破壊の影響

第2章 森林をめぐる「保全」と「保存」の考え方

第1節 日本の里山～森林保全の歴史～

第2節 海外の森林環境政策～保全から保存へ～

第3節 森林の保存活動

第3章 森林との共存

第1節 里山でのボランティア活動

第2節 森林環境教育の動向

第3節 今後の展望

終わりに

現在、世界の森林の面積は約 40 億万ヘクタールあり、これは地球上の陸地の部分の約 3 分の 1 にもあたります。しかし、現在でも森林の減少は止まらず、2000～2005 年の間に年間平均 730 万 ha（北海道の約 9 割の面積に相当）が失われています。森林面積が減少する原因として 1 番の理由は人口の増加である。人口の増加によって使用するエネルギーや食糧の増加が必要になり森林の伐採が増加している。

一方、日本では国土の約 7 割が森になっているにも関わらず日本で使用されている木材のほとんどは輸入に頼っている。事実、日本で使用されている木材の約 8 割が輸入木材である。その理由として木材が安い値段で輸入されることによって、日本の木材が使われない。

日本の里山は約 1 万年前の縄文時代から始まったとされている。そのころは大きな集落があり狩猟と採集を中心とした生活をしており、当時の森林植生の変化を分析した結果、集落ができる前にはその一帯はブナ林が広がっていたが、約 6000 年前に森林から草原へと植生が大きく変化し、残った森林もブナからクリやナラ、ドングリへと植生が大きく変化した。これは人為的な原因があったと考えており、意図的にクリの木を作って維持管理していたことが分かっている。つまり縄文人は周囲の森林を管理し自分たちの食料となるクリの生産林を作り上げていた。

森林保全活動の始まりは 20 世紀の最初、カリフォルニア州のヨセミテ国立公園に隣接するヘッチ・ヘッチー溪谷で保全か保護かの 2 つの論争がおこった。保全主義者は森林地は保全され、すべての市民によって効率的に利用され、管理さえるべきと主張している。対して保存主義者は天然資源を人間の消費のために利用される単なる財貨として扱う考えは重大な誤りを犯していると考えた。この 2 人の意見は違うが根本的な考えは「森林を守る」ことで一致している。つまり同じ森林を守る意見でも「保全 preservation」と「保護 conservation」では活動内容が変わってくる。今、日本では色々なボランティアがあり兵庫方式や萌芽更新法では余分な木を伐ることによって、太陽光が森林に多く入るようにすることによって自然の力で森林や生態系を守る活動が行われています。今後、自然を利用した環境教育が重要になってきます。環境教育によって自らの行動で体験として、学ぶことにより子どもたちの「生きる力」が育まれることが期待される。子どものころから自然と関わることによって、自然に関心を持ち今後自然を守ることにつながる。現在でも森林を

管理して伐採することによって森林を維持しつつ木材を維持することができます。しかし輸入されている木材の中には無断で伐採されている木材も存在している。その木材を買わないために政府公認の木材には「FSC」のマークが付いている。また日本でも京都ではモデルフォレスト運動を通して市民全体で森林を守っている。森林は多くの機能を持っており、人間はその機能と共存してきた。環境教育を通して環境に関心を持つとともに若い世代へ森林を身近なものにすることが大事ではないだろうか。



間伐作業を行う前の暗い森林



間伐作業を行った後の森林



伐り出した木は同じ大きさにして集まめ